



## JICAタンザニア事務所ニュース

# パモジャ



2005年9月号

### 今月のINDEX

- 1) タンザニア援助のツボ「タンザニア 2002 年国勢調査結果」
- 2) 耳より！ JICA 研修情報
- 3) 事務所からのお知らせ
- 4) 特集：2004 年度新規採用職員海外 OJT を終えて

### 1) タンザニア援助のツボ「タンザニア 2002 年国勢調査結果」

山内企画調査員、川村所員

タンザニアでは 2002 年に国勢調査が行われました。そして今般、日本の協力により、国勢調査結果の分析レポートの作成支援がなされています。今月号ではタンザニアにおける国勢調査の実施方法および結果から見てきたことを紹介します。

まず国勢調査とは日本の総務省のホームページ(www.stat.go.jp)によると「国内の人口・世帯の実態を把握し、各種行政施策の基礎資料を得ること」を目的とした調査です。国勢調査で何が分かるかと言うと、まずは当然のことながら国の人口や、年齢別の人口、未婚率、1世帯あたりの世帯人数、出生率、死亡率等が分かります。また、国勢調査の結果は議員数の決定、地方交付税の配布額、各種計画に活用され、非常に重要なデータとなります。国勢調査の実施頻度については、世界各国で多少違いがありますが、約 10 年に一回行われています(国際統計会議によって10年おきに行うべき、そして0のつく年が好ましいと勧告がなされているため)。

さて、タンザニアにおける国勢調査はというと、人口についての情報の他に住居の情報も収集しており、Population and Housing Censusと呼ばれています。前回 1988 年に国勢調査を実施した後、その次の調査は 14 年後の 2002 年に行われました。14 年間も間が空いた原因としては資金不足と 1998 年に起こった豪雨による被害の影響、そして準備不足が挙げられます。なお、国勢調査はタンザニア全土、すなわちザンジバルも併せて行われましたので、以下の記載はすべて、本土およびザンジバルについてのものとなります。

#### (1) タンザニア国勢調査の流れ

1997 年～ 調査区(Enumeration Area)の設定：

国勢調査用の調査区設定に当たっては、様々な要素が勘案されるのですが、簡単に言ってしまうと、タンザニアでは1調査区あたり農村地域では約 800 人、都市部では約 400 人を目安にしています。これに基づき、55,285 の調査区が設定されました。

2001 年 8 月 パイロットセンサスの実施：

各 District から 3 調査区がランダムに選ばれ(合計 369 調査区)、実際の国勢調査と同じように、調査員が質問票(このときは37問)をもとに答えを埋め、結果を読み込みました。特に今回のセンサスでは手集計ではなく、OMR(Optical Mark Recognition)という機械が使われることとなっていたため、OMR で





の読み取りの精度を図るという目的もありました。

質問票(questionnaire)の確定:

全世帯を対象にする Short questionnaire 8問と人口の約 17%ほどのサンプル世帯を対象に行う Long questionnaire 37問が確定しました。Short questionnaire の具体的な質問は、世帯を構成する人の名前、年齢、世帯主との関係、性別、既婚か未婚か、障害を持っているかどうか、国籍、世帯人口です。Long の方になると教育状況や経済活動、出生・死亡、住居、また貧困状況を計るための資産についての質問が含まれています。両方の質問票とも日本人にはなじみにあるマークシート方式になっています。

国勢調査員(Enumerator)に対する研修の実施:

70,287人(Enumerator 55,285人、Supervisor 15,002人)が雇用され、実際の調査に係る研修が行われました。調査員の多くは中等学校の先生だったそうです。

2002年8月25日~2002年9月14日 国勢調査実施

2002年10月15日~データ処理:

上述のとおり OMR による質問票の読み取りが行われました。

2003年1月初頭 第1次結果発表:

ムカパ大統領により、全人口が 34,569,000 人と発表されました。



国勢調査にかかった総額 38,027,607,000Tsh(約38億円)で、タンザニア政府が 26,493,929,000Tsh(約26.7億円)を支出、残りはドナーによって賄われました。

国勢調査実施にあたって政府はテレビおよびラジオを通じ、かなり積極的にキャンペーンを実施し、センスTシャツ、帽子およびカンガも製作しました。ちなみに左の写真はその時作られたカンガで、書かれている言葉は”Jiandae kuhesabiwa”(直訳すると「数えられる準備をしましょう」となっています。

ちなみに日本では国勢調査は5年置きに行われ、Short Questionnaire しか作成されていないそうです。

## (2) 国勢調査の結果から見てくること

主な項目を以下のとおり列举します。

- ・タンザニアの全人口は 34.6 百万人で、男性 16.9 百万、女性 17.7 百万人です。そのうちザンジバルは約 1 百万人で全人口の 3%弱です。
- ・1988 年からの人口増加率は 2.92%で、その前の 10 年間(2.81%)と比べると増えています。HIV/AIDS が人口増加率に影響しているのではという予想がありましたが、現実には逆に増加率が増えています。
- ・平均寿命は 51 歳で、1988 年の 52 歳からそれほど減っていません。
- ・多く項目で言えることですが(例:識字率等)、様々な面で大きな地方間格差があります。
- ・人口増加率が最も多い県はザンジバル都市西部の 9.2%、最も低かった県はリンディ都市部のー(マイナス)0.1%です。
- ・識字率が最高の県はモシ都市部(92%)で、最も低かったのはモロゴローラル(27%)です。
- ・安全で清潔な水へのアクセスではアリューシャが 90%なのに対しウランボ(タボラ州)は 5%です。





なお、国勢調査の詳しい結果分析については、JICA の短期専門家の支援により、今年 10 月頃に報告書が発表される予定です。

### (3) 国勢調査実施にあたっての問題点

様々な問題点があるのですが主な2点をあげます。

調査区の設定：調査員は手書きの地図を持って、実際に現場に行き、調査区策定を行いました。しかし、現場に行くといっても交通手段が無かったりする中で、その作業は膨大で、かなりの時間がかかった上に精度があまりよくありませんでした。タンザニア政府は次回の国勢調査にあたっては GPS による地図のデジタル化を考えていますが、資金調達が問題となっています。

データの質の問題：集計後、様々なデータの不備が発見されました。たとえば途上国には良くあることですが、田舎では自分の年齢を良く覚えていない人も多く、区切りの良い5もしくは0のつく数字を答えてしまうという傾向があります(たとえば自分の年齢は32位だったかな？でも確かでないから30歳と答えてしまおうというように)。また調査員は臨時で雇用され、きちんとした能力を身に付けていない人もおり、それをそのまま書き取ってしまうようです。能力もしくは経験のある調査員なら、あやしいと思ったら、更につこんで聞いたりするのですが(その年は干害の年だった？とかいうように)、そこまでなされていないようです。したがって、純粋に集計すると0と5のつく年齢の人が多いという結果を引き起こしてしまいました。また、単なる調査員の記入ミスで、80歳で小学校に行っているとか、5歳で事業主などというデータが出たりしました。国家統計局が発表するデータとしては、今後は質の向上が望まれています。

## 2) 耳より！ JICA 研修情報

現時点でタンザニア政府に候補者の募集をかけている、日本で行われる研修コースをリストアップしますので、カウンターパートに研修の機会を与える場になれば幸いです。なお、紙面の関係上、研修コース名と研修期間、応募締め切り日のみを記載しますので、詳細な情報が必要な方は事務所の加藤もしくはムソフエまでご連絡ください。以下のコース以外でも研修に関して質問がある場合には、いつでもどうぞ。なお、研修に応募するためには、履歴書、健康診断書およびカントリーレポートの作成、その後人事院のスタンプをもらう等多くの作業と時間が要求されます。ですかなるべく余裕を持って連絡をいただくと助かります。

なお、留意点は以下のとおりです。

- ・ どのコースも基本的にはタンザニア政府の人が対象です(民間会社で働く人は対象になりません。一部のコースは NGO の参加も OK なものもあります)
- ・ どのコースにも応募にあたっての資格要件があります。この要件を満たさないと応募することはできません(特に年齢制限には要注意)。
- ・ どのコースも 1 名 (もしくは 2 名) の枠に対し、4~5 名程度の応募がありますので、応募をしたからといって、受かる保証はありませんので、ご注意ください。

### 現在募集中のコース(コース名、研修期間、応募締め切り日の順)

・ Seminar of local education administration	1/17-2/18, 10/7
・ BBC strategic for improving reproductive health status	11/15-12/7, 9/13
・ National tuberculosis programme management	1/10-2/25, 10/18

### ◆ JICA ウガンダ事務所からのスタッフ受入

川村所員

当事務所が誇れるものの1つに、集団、地域特設、および長期研修員コースに応募する全候補者に面接を行い、事務所としての優先順位およびコメントをつけて JICA 本部に要請書を送付している点があります。事務所の手間はかかる上に、候補者にも事務所までの交通費の負担を強いてしまいますが、より適任者を送り出すためには必要不可欠なプロセスと自負しています。具体的な方法としては、日本人所員1名と研修担当のナシ





ヨナルスタッフ1名の2名のコンビで、1コースにつき2～4人の候補者に対し、1人20分程度の面接を行っています。

2005年8月にその研修のシステムを学ぶべく、新しくオープンした JICA ウガンダ事務所から研修員受入事業を



担当している Ms. Reste Lugemwa が当事務所に研修にやってきました。3日間の研修の中で Reste さんは実際に研修候補者のインタビューに2回参加して、チェックポイントを身に付け、最終日には実際に候補者にすどい質問を浴びせるまでになっていました。その他にも来日前の研修員オリエンテーションに同席したり、ファイリングシステムを熱心に勉強していました。今回の研修では、当事務所で研修を担当している Mr.Msoffe と Ms.Zuhura が優秀な講師となり、技術移転を行っていました。(写真は事務所での研修中の模様。左から当事務所のズフラ

さん、川村所員、今回の主役のウガンダ事務所のレステさん、当事務所のムソフェさんです)

Reste さんからは「時間はかかってもこの研修員のインタビューのシステムを JICA ウガンダでも導入したい。JICA の研修員である以上、事務所は責任を持って選考すべきであり、このためにこの面接システムは有益であると思う」とのコメントが出されました。

#### ◆ あなたの隣の研修員(訂正)

老川所員

前号のこのコーナーで、日本で地方行政の研修を受けた帰国研修員の一覧を掲載しましたが、帰国後に異動によりポストが変更になっている参加者がいましたので、その方々の現在のポストを以下の表にて改めてお知らせいたします。

	Name	Year of Training	Current Tittle	Region/District	Previous Post
1	Mr. Joel M. Shimba	2002	DED	Moshi MC	Dodoma DC
2	Mr. Paul Chikira	2002	RAS	Tanga	Morogoro Region
3	Ms. A.F. Ndimbo	2002	RAS	Mbeya Region	Morogoro MC
4	Ms. Joyce J. Mbutta	2002	DED	Maswa DC	Ulanga DC
5	Mr. Fred R. Mwaisaka	2002	RAS	Ruvuma region	Mbeya Region
6	Mr. Solanus M. Nyimbi	2002	DED	Karatu DC.	Mbeya DC
7	Ms. Getrude K. Mpaka	2002	RAS	Coast Region	Tanga Region
8	Mr. Obeid K. Mwashwa	2002	DED	Lushoto DC	Muheza DC
9	Mr. Kyuza J. Kitundu	2003	DED	Bariadi DC	Bukoba TC

### 3) 事務所からのお知らせ

#### ◆ 今月の危機管理上の特記事項

老川所員

皆さん、こんにちは。今月からこのコーナーデビューの安全対策担当、老川です。よろしくお願いします。先月号でも選挙関連の動きに触れましたが、今回はより具体的な情勢の紹介と皆さんに関係する安全対策措置について説明します(そういえば日本も今は選挙の話題で溢れていますよね)。

<選挙キャンペーン開始>

8月21日(日)に選挙キャンペーンが開始されました。新聞やテレビなどでも大きく報道されていたのでご





存知の方も多いと思いますが、DSMの Jangwani Grounds で行われた与党CCMの決起集会にはなんと6万人もの支持者が集まりました。連合共和国の大統領選には最終的に各政党から10名が立候補することとなっております(Progress Party of Tanzaniaからは初の女性候補が出馬しました)。このキャンペーンは投票日前日の10月29日まで続き、この間は各地で選挙に関連した集会やデモが頻繁に起こることが想定されるため、かねてから注意喚起しているように、群衆を見かけた場合は決して興味本位で近づくようなことはしないようご注意ください。

＜選挙に関連した安全対策措置＞

ザンジバルは野党 CUF の支持者が多く、前回の総選挙後にも大きな衝突が生じましたが、今回についても投票日が近づくにつれて緊張が高まっております。実際に8月に入ってから、暴行・襲撃事件がストーンタウン等において頻発しており、外国人といえども十分注意が必要な状況になっております。このようは情勢を受けて、JICA事務所では大使館・JICA本部とも協議した結果、ザンジバルについては、**投票日の前後1ヶ月間については「業務目的外渡航見合わせ」と**することを決定しました(この前後1ヶ月という期間については、今後の情勢次第で拡大する可能性もあります)。この期間より前にザンジバルに渡航される方につきましても、上記のような情勢を踏まえて、1)夜間外出は控える、2)人気の少ない場所は通らない、3)各政党の事務所等の周りには近づかない、といった注意事項を常に念頭に入れておください。

＜今月の犯罪被害報告＞

日時	都市	状況	教訓
6/16 ~21	タンガ	留守中に窓際に置いてあったビデオカメラを盗まれた(窓が壊されていた)。	窓際に貴重品を放置しない。
7/10 午後 1時	ムトゥワラ	バスを待っている最中に2人組に話しかけられ、その後気がつくとポケットに入れていた携帯電話がなくなっていた(ストラップが切断されていた)。	大勢がいる場所では携帯電話はバッグの奥等に入れておくこと。また、仮にストラップを使用する場合は簡単に切断できない強度の高いものを選ぶこと。
7/24 午前 1時	ンダンダ	夜中に寝ていた自分の警備員を注意したところ、胸ぐらをつかまれ頭突きをされ、押し倒された。大声で隣人を呼んだところ手を離れた。	警備員に注意・警告を与える場合は、夜間や相手が武器を携行している場合等は特に、相手が感情的にならないように慎重に対応すること。
8/1 午後 5時	ダレサラム	道路の測量調査中にズボンにかけていた携帯電話ポーチのチャックを開けられ、携帯電話を奪われた。(防ごうとしたところ手に噛み付かれた。)	人が多い場所においては、携帯電話を目に付く場所にしまわずに、バッグの奥等に入れておくこと。
8/2 午前 11時	ダレサラム	満員のダラダラ内で集団スリ(5~6名)に会い、携帯電話を盗られる。本人は犯人グループが降りた後にスリに気づく。	帰国間際の被害であり、気の緩みもあった。ダラダラ内では細心の注意を払うこと。

◆ 東南部域内教育セクター戦略化ワークショップ

五十嵐企画調査員

先月8月8日から10日まで、ナイロビの東南部アフリカ地域支援事務所において「域内教育セクター戦略化ワークショップ」が開催されました。今回の会合は、援助協調の進むアフリカ東南部地域においても、特にその傾向が著しい教育セクターに焦点が置かれたもので、エチオピア、ウガンダ、ザンビア、ケニア、タンザニア、モザンビーク、そして中西部アフリカから、やはり援助協調が進むガーナ、そして本部からの横関祐見子国際専門員を加えた JICA アフリカ教育関係者計 12 名がナイロビに集いました。会合では、参加各国の教育セクター援助協調枠組みの理解、日本の教育協力経験の共有、JICA 関係者の連携強化、そして、効果的な教育協力実施に向けた今後への課題を明らかにすることを目的とし、支援事務所による援助協調全般にかかるセッションや参加者による発表、本部との TV 会議が行われました。

参加各国では共に、各ドナーによる個別のプロジェクト型支援から、当該政府の制度に従った財政支援へと移行が進んでいますが、援助協調の進行程度やその構造は多様です。例えば、支援効果を上げるため、複数ドナーの資金をひとつの銀行口座で一括して管理する「コモンバスケット」を通じた支援方法





がありますが、モザンビークやザンビアでは教育セクター全般を支援するバスケット、タンザニアでは初等教育に特化したもの、エチオピアは教師教育用とワークショップや調査研究費用と用途を区別した2種類のバスケットを管理しています。

日本は制度上の制約が多く、現在のところ、どの国も、このようなバスケット型支援には参加していませんが、各国共に協力隊派遣事業、草の根無償資金協力や NGO との連繋などをうまく組み合わせ、限られたリソースで巧みに教育協力を行っています。特に、初中等レベルでの理数科教育改善を目指した現職教員研修は活発で、ケニアの SMASSE プロジェクトのように、日本人専門家が当地のカウンターパートと共に定期的な研修を実施している国もあれば、援助協調が非常に進んでいるタンザニアのようにプロジェクトの立ち上げがほとんど不可能な場合は、シニア隊員が州の視察官事務所と協力しながら、政府の研修制度を支援する傍ら、国内の理数科隊員の連繋強化と情報共有を図っている国もあります(タンザニアでの研修については先月のパモジャで紹介されました)。一方、モザンビークやエチオピアでは、住民参加による学校建設プロジェクトが行われています。NGO やコミュニティが学校の建設、運営、管理に積極的に参加することで、コミュニティのオーナーシップが高まるだけでなく、建設費用や資材調達などの面で、より一層現場のニーズに応えられるという利点があり、教育へのアクセス拡充支援する方法として注目されています。これらのプロジェクト型支援に加え、政府の教育行政能力強化も重要です。当該国の教育開発計画の効果的な実施に向けて、参加国では個別専門家や企画調査員が政府との協議やドナー会議などに出席し、人的・知的貢献を果たしています。

JICA 本部との2回にわたるTV会議では、本部からまず資金協力のための小規模バスケットの設置、本邦研修や協力隊員のプログラム化など日本国内における援助協調にかかる取り組みの概要が報告されました。これに対し、ナイロビ会合の参加者からは、コモンバスケットに出資していないため教育セクターにおけるドナーメンバーとしても活動に制約がある、現地で運用できる活動費が少ないなどの問題点が挙げられ、これらの課題や提言を踏まえて、今後の対応について意見交換が行われました。JICA 本部でも状況改善に向けた取り組みが少しずつ進行している様子がTV会議を通して感じられましたが、教育セクターレベル、あるいは JICA を超えた日本の援助政策・制度そのものに課題が多く、援助協調がますます進むアフリカで、今後日本としてどのような教育協力ができるのか、これからも模索が続きそうです。

#### ◆ 協力隊関連

ボランティア調整員

8月6日(土)～9日(火)、ダルエスサラームの国立博物館において、JOCV 主催で「原爆展(World Peace from Tanzania～HIROSHIMA・NAGASAKI memorial exhibition～)」が開催されました。この企画は、広島国際文化財団の協力をいただき、隊員支援経費を使って実行されたものです。また、映画上映にあたっては、在タンザニア日本大使館の協力もいただきました。会場にはおよそ500名が訪れ、原爆に関するポスターや第二次世界大戦前後の年表(JOCV 作成オリジナルです)、そして原爆の被害に関するビデオに見入っていました。来場者の中には、折鶴作りコーナーで、隊員に教えてもらいながら、一生懸命ツルを作り、自分の名前を記入している方もいました。4日間でできあがった千羽鶴(池田大使、木村映子さん、小幡所長、木野本次長作成のツルも含まれます)は、広島平和記念資料館に送付される予定です。核兵器による被害の恐ろしさや平和の大切さをタンザニアの人々に理解してもらえよう、英語のポスターにはスワヒリ語の注釈を加え、ビデオの上映前にはスワヒリ語での説明を行うなど、原爆展開催チームのメンバーは、展示に工夫を凝らしていました。足を運んでくださって励ましてくださった方、ご協力くださった方、どうもありがとうございました。

なお、この原爆展は、これからムバヤ、マサシなどでも開催予定です。





原爆展開催チームと支援チーム



展示の様子

◆ **健康管理員関連**      **狂犬病の再確認・再認識を！**      松藤健康管理員  
16年度1次隊 村落開発普及員(ルンゲンバ)の星 誠隊員から動物咬傷の報告が以下にありました。

今回、2度にわたる動物咬傷を経験しましたので自己の反省を含めて報告いたします。  
まず1度目の動物咬傷を受けるにいたった原因ですが、友人の Peace Corps 宅を訪れた際にそこで飼われている犬に触れたことです。その犬は、非常に人懐っこい犬であり、特に欧米人と見ると喜んで飛びかかってくるような犬でしたが、その愛くるしい顔ゆえに思わず頭をなでたり、体に触ったりしました。しかし、翌日になり手の甲に出血を伴う引っかき傷を見つけたときは「これはまずい」と思い、健康管理員に連絡を取るとともに、病院を受診し、狂犬病のワクチン接種を行いました。ワクチンの接種を無事終え、その後は犬の経過観察を行いました。その10日間はワクチンを接種済とはいえ「発病したら100%死亡する」という言葉が常に脳裏をよぎり、何をしても落ち着かない状況が続きました。この1度目の咬傷を受けた要因として、狂犬病が危険な感染症であり、タンザニアが狂犬病の流行地だという認識が足りなかったこと、自分が咬傷を受けるはずがないと思っていたことをあげることができます。

次に2度目の咬傷についてですが、これは咬傷後11日目に犬の様子を見に行ったときに起きました。このときは、再度傷つけられる事が無いように両手を上着のポケットに入れたまま犬の様子を見に行きましたが、その犬は全くの正常であり「よかった。これでこの犬は狂犬病に感染していない。安全な犬だ。」と思いました。そして、友人の勧めに応じ室内のソファへ腰掛けましたが、その家は犬が室内に自由にに入れる構造になっており、ソファに腰掛け会話をしていた時にも、案の定、その犬が入ってきました。そして、自分の方に近づいてきたときに、本当はどかしたかったのですが、手で追い払うことは危険と感じ、ポケットから手を出さなければ大丈夫と思っていたので何もませんでした。しかし、ポケットに手を入れているにもかかわらず、その犬は口先を私のポケットの方にせ手の甲をなめました。このときに、手の甲に別の傷があることに気づきました。正直、この傷がなめられたときについた絆なのか、それとも元からあった傷なのかは分かりませんでしたが、その帰り道、自分が様子観察をしたときに犬が元気だったのは、10日前にこの犬が狂犬病ウイルスを持っていなかったという証拠にすぎず、現在の犬の状況を示すものではないということに気づき愕然とするとともに非常に後悔しました。

その後、Mafinga と Iringa Hospital の医師および健康管理員と相談した結果、今回は1回目の咬傷後のワクチン接種(暴露後2回接種施行)より、間隔が7日間しか空いていないこと、咬傷した動物が明らかに健康であることなどにより、ワクチン接種は行わず10日間の経過観察のみとしました。しかし、この2度目の経過観察の間は、ワクチン接種無しであったことから医師に大丈夫だと言われても心配となり、WHO のホームページを見たり、WHO にEメールを送ったりもしました。この咬傷に関しては、咬傷後12日目に電話にて友人の犬の健康を確認し事なきを得ましたが、この2度目の10日間は、狂犬病ウイルス感染の恐怖、自己反省及び不安で、前回と同様、何も手につかない日々をすごしました。





これら2度にわたる咬傷を振り返ってみて思うことは、狂犬病にかからないために最も重要な事は、「犬に触れない」ということです。狂犬病は、犬などの哺乳類動物にかまれない限り罹患しないので、その感染経路を絶つてしまえば感染のしようがありません。犬などの哺乳類動物に触れさえしなければ、いらぬ不安を抱くこともワクチンを探し回すことも必要ありません。すなわち、それがもっとも簡単で効果的な予防対策と言えます。

以上、動物咬傷の報告を行ってきましたが、今回の件を一言でまとめれば、結局すべて自分の不注意から起きたことであり、避けることが出来たことでした。狂犬病感染に関するリスクを考えた場合、咬傷後の処置では心的、時間的に非常に負担を強いられるとともに、死の危険もあります。したがって、咬傷をされないようにすることが最も重要だと考えられます。

**もし万が一咬まれた場合は、発症を抑えるために、以下の対応を至急行う必要がありますが、地方では、品質管理の行き届いたワクチンの確保が困難です。繰り返しになりますが、狂犬病は発症したら死亡率100%です。咬まれないように、犬などの動物には自分から絶対に近づかないようにしてください。**

<動物に咬まれたときの対応>

① 傷を石鹸と流水で十分洗い、傷の消毒を行う。手洗い用の水がなければ、ジュースでも何でも構わないので、とにかく動物の唾液を流す。

② 傷は、ふさがなくて病院を受診する。病院は、プライベートの病院を選んだ方が良いが、地方においては狂犬病ワクチンを保管していないことが多く、州立または県立病院にしかない場合がある。

③ 暴露後0日目(第1回)の狂犬病ワクチンの接種(咬傷後24時間以内)。

タンザニアで使用されているワクチンは、Verorabである。

傷によっては、破傷風のトキソイド接種が必要となることもある(医師の判断に任せる)。

④ 加害動物を観察し、暴露後3日目(第2回)の狂犬病ワクチンの接種。\* 加害動物に異常がない場合は、0日目および3日目の2回接種で終了。

⑤ 加害動物が死亡または観察不可能な場合は、暴露後7日目(第3回)、14日目(第4回)、30日目(第5回)接種する。

\* 上記の対応は、暴露前に3回の予防接種を受け基礎免疫を終えてきている場合です。協力隊員は全員接種しています。暴露前予防接種(3回)を受けていない方は、傷の程度や加害動物の状況に応じて、暴露後5回のワクチン接種に狂犬病血清・グロブリン等の接種が必要となることもあり、タンザニアでは入手が困難です。

また、ワクチン接種の際は、必ず、メディカルインフォメーション(隊員など)や予防接種カード等に、ワクチンの種類や製造番号等の記載を忘れないようにしてください。

## ◆ JICA 関係者カリブ・クワヘリ

編集者の都合で掲載が遅れてしまい、申し訳ありませんが、日本に帰国された細井専門家から原稿を送付していただきました。

**細井岳専門家 (指導科目:小児医療、派遣期間:2002.4~2005.6、配属先:ムヒンビリ病院)**

タンザニアの皆様、3年と2ヶ月の間、本当にお世話になりました。国際協力という未知の分野で、なんとか家族一同無事過ごせたのは皆様のお陰と心から感謝しております。医師としては非常に貴重な体験をしたと思っております。仕事の面では満足のいく結果が得られたと自負しておりますが、この世界での素人の限界も痛感いたしました。これからは、この世界からは足を洗い、日本での小児医療に、どっぷりと浸ってみようと考えております。サファリやインターナショナルスクールなど、家族にとっても宝物のような日々を体験できたと思っております。今後この体験が我々家族の行く末にどのように影響するのか楽しみです。皆様のご活躍を一人の日本国民として応援しております。くれぐれもお体に気をつけて下さい。







#### 4) 特集：2004 年度新規採用職員海外 OJT を終えて

塩塚 美那子、山本 美奈子

JICA は昨年からの初め試みとして、4月に採用した新卒職員の海外事務所における研修を導入しました。この制度の導入を受け、タンザニア事務所においては第1号として塩塚および山本両職員を 2004 年10月から 2005 年4月までの半年間受け入れました。彼女たち二人の在外事務所における業務の一環として、指導係の先輩職員から事務所のニュースレターを毎月発行しろという指令を下され、このパモジャが産まれたという経緯があります。二人はタンザニア事務所での研修後、各部署に配属されました。そこで、日本に帰国してから半年経った二人から、近況報告をしてもらいました。

なお、9月には今年4月に JICA に採用された有光職員が、研修生第2号として、当事務所で7ヶ月働くことになりました。パモジャについても来月号からは有光さんが担当することになりますので、よろしくお祈りします。

みなさんお久しぶりです！塩塚美那子です。

今回パモジャの原稿を書いて初めて気がつきましたが、私がタンザニアを出てからもうすぐ半年になるんですね。本当に早いものです。



私は今、JICA 本部の社会開発部ガバナンス・ジェンダーチームに所属しています。プロジェクトの担当者として、活動が順調に進むように予算管理や手続面でのサポートをしたり、プロジェクトの参考になりそうなガバナンス・ジェンダー分野の情報提供を行っています。いろいろな国の専門家の方や事務所とのやり取りがあり、みなさんの苦勞を身近に感じることができる部署です。

ただ、担当の国々を実際に訪れたことがないと、メールや電話のやり取りだけでは行き違

いや勘違いが生まれてしまうことがあります。経験も知識も足りない私が、担当者として何ができるんだろうと悩むこともあります。そんなときは、タンザニアで出会ったみなさんの活動を思い出して、現場の様子を一所懸命イメージしながら仕事に向かっています。タンザニアのプロジェクトもいくつか担当していますが、やはり現場でお会いしているみなさんとは、メールでも最初から本音でぶつかり合って議論ができます。早く他の国のプロジェクトも自分の目で見て、現場のみなさんと熱い意見が交わらせるようになりたいです。

これまで、小さなことでも「あなたが担当でよかった」と言ってもらえたことがなよりの私の幸せです。今はまだ担当者として頼りないですが、少しでもプロジェクトのお手伝いができるよう、走り回って、考え抜いて、現場のみなさんと真摯に向かい合って、幸せを積み重ねていきたいです。

このパモジャが発行される頃には、新一年生の有光さんがタンザニア研修に来ていることでしょう。去年山本さんと私が学んだたくさんの経験に負けないくらい、7ヶ月間をフルに生かして、彼女にも元気いっぱい吸収して欲しいです。

最後に、一時帰国の専門家の方や帰任された協力隊の方とおいしいチャクラができるのが、私の一番のオアシスです。みなさん本部にお越しの際は、ぜひぜひ7階に寄ってくださいね。

(写真：母校の高校生の職場訪問を対応。一番右端が塩塚さん)

衆議院解散、総選挙(9.11)と日本は大変慌しいですが、みなさんいかがお過ごしでしょうか。現在は兵庫センター業務チームで働いています山本です。





私の今のお仕事を少し紹介させていただきます。私は様々な JICA 事業の中で「研修員受入事業」を担当しています。海外の行政官や技術者などを日本に招いて、日本の技術や知識を学ぶ研修コースの運営です。パモジャの「耳寄り！研修情報」でも紹介されており、タンザニア事務所が応募の窓口となって、私は兵庫でこれらの方々の受入とコースの計画・評価をやっています。これだけでなく、JICA 国内センター職員の醍醐味でもある(と私は思う)、一般の人々に「世界」や「国際協力」についてより深く興味を持ってもらうための活動を手伝うこともあります。

帰国してからというもの、JICA 内外の色々な方に「6ヶ月間タンザニアで研修してどんないいことがあったの？」とよく聞かれます。単純かもしれませんが、途上国への援助をしている JICA で働く私が、タンザニアのママの水汲み労働や、森林を伐採しすぎて土壌流出が起こったハゲ山や、学校の教室に机やイスがない光景や、雨が降らなくて

作物がとれないんだと嘆く農民の話などを見ず聞かずして、いかに良い援助ができるだろうかというところではないでしょうか。そして、そのような光景に常日ごろまっすぐ向き合っている JICA の専門家の方々、協力隊員の方々、そして JICA タンザニア事務所の方々を尊敬し、思い浮かべながら日々仕事をしています。本当です。ですので、海外 OJT 研修があったことによって、とても充実した、よりリアルな仕事ができていると思います。

2年目を迎えてはじめて自分の担当の業務を持つことになり、辛くて叫びたいことも多々ありますが、胸をはって言えるのは「仕事が楽しい！」ということ。そしてこの仕事の楽しさをいろんな側面から教えてくださった、タンザニアでお世話になった方々に改めて日本より御礼申し上げます。これからもみなさんと一緒に国際協力をしていけることを誇りに思いつつ、更なるご活躍をお祈りしています。(写真:兵庫センターにて。下の右端が山本さん)

☆☆★☆☆☆☆

パモジャでは引き続き皆様からのご意見・ご感想をお待ちしています。特に特集ページでは援助分野に関係なく、タンザニアのさまざまな分野における一般的な概要をご紹介します。皆様の役に立つ、楽しいニュースレターにしたいと思っておりますので、取り上げてほしい特集・リクエスト、投稿など、どしどし下記のメールアドレス宛、あるいは直接ご連絡ください。

なお、パモジャ(Pamoja)とはスワヒリ語で「一緒に(together)」という意味です。

Email address: Kawamura.Yasuyo@jica.go.jp



